

こみきみこ「著」
本田一成「翻刻」

今年は昭和四十年。あの人権闘争があつた昭和二十九年から十一年もたちました。

当時十九歳だった私も、もう三十一歳・・・二人の子の母です。今更この十一年の月日の重みを感じずにはいられません。

争議当時の写真をみまして、子供が「お母さん、僕どこに写ってるの？」と聞きます。

「まだたけちゃん、生まれてないの」といいますと、「ちえっ、つまらないの」と不服そうに申します。

十一年たった今も、この町の人たちにあの争議の記憶は生々しいものがあります。

けれど、本当の意味での当時の私たちの気持ちを理解してくれている人は少ないのではないのでしょうか。

只表面に出た乱斗事件とか、投石事件などを興味本位に記憶していただけないだろうかと思えますので、ここいらで私の当時の記憶を整理しておきたいためにも、

人権斗争の覚え書といったようなものを、作ろうと思いたちました。

これはあくまで私個人の目で見たと争議の一端にすぎません。

近江絹糸という当時一万二千人の従業員を抱えていた大きな組織の中の一人の覚え書きです。

その時19才の私は!!

争議の発端

昭和二十九年六月二日

夏の事務服に着換えて、まだ二日目、肌寒いようなくもりの空の下で、仕事を終わった私達は、工場の正門のすぐそばの広場でバレーボールをしていました。私達事務所の女子と、電気部の男子のメンメン。

私達は年が近いせいかみな気が合って何をするにもチームワークがよく、この日も別に決めたわけではありませんが、適当に守備位置を決めて大さわぎで試合をしていました。心の底から試合のなりゆきに熱中し、ムキになって、ボールを打ち合っている時、不意に塀の外でスピーカーの呼びかける声がし、そちらを向いた私の目に、あざやかな赤旗の色がうつりました。

その時の赤旗のきれいだったこと・・・今でもまざまざと思いだせるくらいです。

スピーカーの声は、私達に労働者として目ざめよと説いているようでした。というのは、すぐに守衛が走ってきて、やかましいからやめるようにと促させてしまったからです。

その時は東電労組の人だったらしいのですが、案外あっさりとして引きあげてゆきました。だんだん遠ざかる赤旗を私達は妙にシンとなって見送りました。

その後は何となく試合もはずみませんでした。それに夕暮れも迫っていました。いつの間にか、私達はバレーをやめ、口数少なく解散しました。

何かが起こりつつある、と思ったのは私だけではなかったようです。

私達はこの一年間、社長が工場へ来る度にみんなを集めて開かれる社長の訓辞の中にしばしば、ゼンセンドウメイという言葉がとび出してくるのを記憶していました。

ゼンセンとは何さ？ とお互いに云っていたものの、それを正確に知っているものは私の回りにはおりませんでした。でも、この日を境に、私を始め、近江絹系に人々は、いやでもゼンセンドウメイを知らなければならぬ破目になりました。

私はこの一年間、近江絹系の社内生活になれて疑いつつも、一応充ち足りた毎日を送ってきました。八時から始まる仕事の前に、七時半から仏間で行われる朝礼というものにも、別に抵抗を感じなくなりかけた頃です。

はじめて仏間で勤行に参加した時は、その異様なふんい気につつまれて、これが富士宮の市内に存在する工場かとおどろきました。

男女社員が正座してとなえるお経の音が窓の外にまで流れ、私達新入社員は只々、おどろきと怖れの入りまじった不思議な気持でこの光景を見つめました。

毎週一回、木曜日がお経をとなえる日で、その他の日は、社員ならみなもっている鑑手帳というものにかいてある格言のようなものを読みあい、工場長が訓辞を与えて、解散になるのです。

なれないうちはしびれがきましたが、そのうち習慣というものはよくしたもので、お経はスラスラと暗記できるようになりましたし、くつ下に穴のあいている男子社員の後ろにすわった時など工場長に見つからないように、みなでひざをつつきあって笑いをこらえる

ことが出来るようになりました。

私達女子社員は各地の高等学校を卒業したものばかりでみな寄宿舎生活をしておりました。

私達の寮は、家庭寮と呼ばれていまして、その昔はお作法やお茶などを習った寮とかで、一般の家そのままの間取りで、玄関や床ノ間のある八帖、居間風の六帖など、みな部屋の条件がちがうのですが各自くじびきで部屋割りをきめ、現場の女子工員とは一応へだたった生活をしていました。

その頃は工場の人員が急速にふくれ上った時だったので、女子寮では六帖に八人というつめこみ方をしていたのですが、私達も八帖に五人とか、六人とかいう風に、満員の状態でした。

仕事は決して楽ではなく、生産増強のかけ声の中で残業は当たり前、男子社員などは休みもほとんどないという条件の中で、私が耐えてゆけたのは、この家庭寮のふんい気だったかもしれません。

修学旅行の旅館の光景を想像していただければ私達の寮を想像してもらえましょうか。

文字通り、クタクタに疲れて帰ってきてても、寮の中に帰ると、何かしらたのしいことが待ちうけていました。誰かがパーマをかけてきても、靴を買っても、服を作っても、それはすぐに寮の中のみんなに知れ、十人以上の若い娘が、口々に、批評をしたり、その合い間におかしを口へ運んだり、お茶を飲んだりしたり興が乗れば、てんでに楽譜をもち出してコーラスをしたり。

昼間のつらいことはみな夜に発散させました。

若いということは何とというかかけがえのない尊さだったろう、

しみじみそれがわかるこの頃です。

けれど、工場の中に眼を転じてみれば、残業につぐ残業、増産につぐ増産の日々があったのです。

私は給与係、従業員の給料計算の

係りでした。当時、一二〇〇人くらいの従業員の給料は、六人の女子社員の担当でしたが、急激にふえた従業員は、一八〇〇人くらいにまでなり、毎月の給料計算は、いつも残業でした。

今とくらべて人員の多いこともさることながら、個人の残業や早出、休日出勤などがあまりに多く、それらを間違いなく、給料の中にくり入れることは、大変でした。

女子の残業は一日二時間というのが、基準法で定められた最低限度なのですが、平均して四時間は働いていたでしょう。

成年者ならともかく、未成年者の残業には私達は困りました。

女子の未成年の残業は禁じられていますから注意して下さいと工場の担任者にいいますと、

「そんな四角四面なことを云ってて、決められた生産額に追いつくと思うか、アホー」などとどなられるのがオチでした。

担任者も係長も、そして工務課長も、自分達の工場の生産を上げることに血眼になっていました。

これは各工場の競争のような形になり、そして工場では、番別の競争になり各職場の壁には毎日、毎月の出来高がグラフに出され、みな競争意識をいやが上にもあおり立てていました。

担任者や係長は、一ヶ月のうち、一日も休まず女子の班長や組長も、それにならって公休の出勤を半ば公然とやっています。

そうなりますと、工場につけている出勤簿は、基準法違反の立派な見本になりますので、

私達は毎月出勤簿の作り直しを致しました。

そして見破られないように、わざと汚い手で頁の所をこすったり、油をつけて汚したりしました。

私は自分のやっていることを悪いことだとは知っていましたが、私よりもっと偉い人達が

この件については黙ってかまっていますし、進んで協力してくれてましたので（偽出勤簿に印カンを押ししてくれたり）、バレたらその時のことと、覚悟してました。

人間の心理とは妙なもので、これで役人をゴマかせるのかと思うと、面白い気もして、本物とそっくりなのが出来ますと、嬉しくなったりしたものです。

これで毎朝の朝礼で、鑑手帳をひろげれば、「うそは申しますまい」などと朗読しているのですから矛盾していることおびただしいものでした。

目の色を変えて生産生産と追いまくられているのを見ていますと、私は工場で黙々と働いている彼女達に哀れを感じていました、

私達は昼の休みは一応バレーをしようと喫茶へ行つてうどんを食べようと自由です。

けれど、台についている彼女達は、休み時間にも台が廻っているため、御飯を食べる時だけ友達にみてもらっているのです

御飯もろくろく食べていられないのです。

「何分くらいで食べる？」と聞いたら

「三分かかれば食べ終わるよ」とこともなげに
答え、その時は「それじゃあ、休みもヘチマ
もないじゃないの」と私達は大いにフンガイしました
が、私達の力では、どうなるものではありません。

工場では何番の出勤前の正午一時半に入場
行事をやり、先番退場の一時四五分に、退場行事
というのがあり、当番に当たった担任者が、台の上で
太鼓をたたきます。

それにあわせて、みな「夕静けき森の中
月光木ノ間もるところ、雲流れゆくれいめいの
光に大気澄むところ、自然の靈氣身にうけて
我に人生を思うかな」という歌と一高の寮歌と
同じふしで歌うのです。それが終って今月
の目標の言葉を唱和し、そして体操という
順序でした。

先番の時は七時三〇分の朝食のあと、ずっと何も
たべないで働いて、二時ころまで昼食なしです。
からずいぶんおなががすいていることだろうと思います。
そして寮へ帰ればすぐにお掃除、それがすんで
入浴、そして外出は夜八時半までというのでは、
ろくに自分の時間がないのは当たり前でしょう。

女子寮の舎監室というのは当時は、私達の
事務所などより工場に密接につながり
権力もありました。

舎監はみな先生と呼ばれ、大学出の女性が
なっていて、私達とはおのずからちがう
空気をもっていましたが、まあまあ両者の
中にはうまくいっておりました。

舎監室には私達と一緒に入社したSさんが事務員として入り、その他に一年先輩のUさん、そしてずっと以前工場でケガをし片腕を切断してしまったSさんがいました。

その他はみな舎監の連中でA、B、Cの各番に一人ずつ、そして教育係の社会などに数人がいました。

女子社員といっても全部事務所内ではなく、売店や喫茶も女子社員の担当でした。

そちらに行けば気も楽なのでしょうが、勤務が二部の交代で夜おそくなりしますので気の毒でもありませんでした。

今までそれぞれ異なった環境で育ち、みなちがう個性の持主が同じ屋根の下でくらすのですから、気の強い人は強いなりに、弱い人はそれなりのおのおのゆずりあって、精いっぱい現在をたのしんでいます。

四月一日のエイプリルフルなど、みんな罪のないウソをいいあってふだん冗談をあまりいわないHさんが、皇太子の乗った船が沈ぼつしたなどと夜おそく外から顔色をかえてとびこんできた時などは、みな総立ちになって大さわぎをし、あとでだまされたとわかって、アツといわされました。

私は歌が好きでしたから、すぐに歌の仲間がふえ夜など寮にいる連中で「青きドナウ」や「流浪の民」や「ハレルヤ」などを、声をかぎりに合唱しあいました。

昼のつらさや、仕事に対する不安や、不信、それらは夜のこの心あたたまる交歓の中にくすらいでゆくようでした。

本社から四月にＴさんが転勤してきました。

そしてそのＴさんが、そろそろ富士宮になじんで来た六月、事件は始まったのです

彼、Ｔさんこそ、この事件の最初の主役だったのです。

赤旗が工場の外ではじめてなびいたその日、

西側の塀の外では一寸した暴力事件が

あったのです。全織のオルグの人達が

ビラをまきに行き、社会党員で近江絹糸

のすぐそばに住んでいたＹさんと一緒に西門の方

へ行った時、守衛にとがめられて

もんちやくを起こしました。

その時、つきとばしとか、つきとばされたとかで少しいざごぎがあったようです。

そのビラを守衛が拾って泥のついたまま、工場長の机の上におきました。

工場長はこんなものもやしてしまえと、いって掃除をしている私達に命じました。

ひそかにそのビラは私達の間に見えられ、今度のさわぎが意外に根強いところから生れているという実感を呼び起しました。

そのビラは本社の社員が労働組合を結成し、ただちに全織同盟に入り、同盟はこの組合の加入を承認し、全面的に支援する、ということ、本社の労働組合の役員の名が出ていました。

おどろいたことに、それら役員の名は、私達が知っている本社でも最も秀でたメンバーでしたので、只、単なる一時的なやがらせなどで結成した組合ではないという意味がそこから汲みとれました。

動揺したのは私達ばかりではありません。
男子社員の中でもそのビラをみて、顔色を変えた
人々が多くありました。

全織なんていってもやはり結局は十大紡
中心やで、近江絹糸が最近のびてきたやろ、
邪魔しようとして、かなわへんもんやから、組合を
使おうて会社つづすつもりや、本社のヤツラはな

会社つづれたら十大紡のどこかで使おうてやる
いわれて、安心してやっているにちがいないぞ・・・
などと、うがった見方をするひともありましたし、
Tさんは黙ってビラをよみ、みんなのさわぎにも
泰然自若とし、落ちついていました。

その日はそれくらいで終わったのですが、
六月四日、さわぎは工員クラスの人々に
及んでいました。

何しろ朝からスピーカーで外から呼びかける
のです。赤旗の数は最初の日よりふえて
女子寮ではこれに対抗し、寮の放送は
レコードをガンガンとかけるので、そのやまかしいことと
いったらお話しになりません。

そして彦根でも大垣でも津でも
同じような組合結成の呼びかけが行われて
いたのでした。

私達は夜間の無用の外出は禁じられ、
夜部屋へ集まる以外に時間のつぶしようはなくなり
ました。

当然、私達の話題は現在起りつつあること
に集中します。

私達は外のさわぎを只ばからしいとか

うるさいとか、ひとことで片付けたりはしませんでした。会社のやり方のキタナサを一番知っているのは私達であつたかも知れないのです。

それ故、その会社のやり方に攻撃のホコ先が向けられている時ですので、当然、外部の呼びかけに対して、好意的に解釈していました。

私はふだんから感じていた会社の冷酷な点をみなに話しました。

みなもそれは感じていたと言いました。

使える間はコキ使って、いったん病気になると破れたぞうりを捨てるよりもあっさりとは、捨ててかえりみない会社のやり方は、みなの中の心の中にとつくに不信の念を植えつけられていたのです。

どうする？ 本当の難問はここからでした。私たちはどうしたらいいのか。もし富士宮で本社のようなさわぎが起つたら、私達のとるべきことはどのようなことなのか。

勿論、会社では私達の動きを封じようとするでしょう。

本社でも一番さきに組合に加入したのは意外なことに社長のすぐそばで働き、社長から個人的にも目をかけられてきた人達だったので。だけど、恐らくここではそうすることはできません

まい。私達は門の中です。

彼らは門の外です。どうしたら一番いいのだろうか
混打綿の女の子が勇敢にも組合に加入

したというニュースをもって女子寮勤務のSさんが来た時は私達は正直いって、「してやられた」という気持ちでした。

会社側のキタないやり方に対してフンガイしているのは私達だけなのかと思っていたのです。

それだけ私達は彼女たちに対し、優越感みたいなものを感じていたらしいのです。

理くつの上ではどうあれ、私達は彼女等に先をこされました。

何となくつまらない気分が私をおそいました。

庶務のKさんが声をひそめて、こう言わなければ、私はそのままいつもと同じように、おやすみを言っ、自分の部屋へ引くつもりでした。

「あのね、まだはつきりわからないけど、今度本社からきたTさんね。あの人何となくあやしいのよ」

「あやしいつてどういう風に？」「組合のこと、何か関係あるみたい」

「あんたどうしてそんなこと言えるの？」「かど浜でTさんがね、知らない男の人と話したのよ」

「へえー、只それだけでどうしてあやしいのさ」
「だってTさんはこの人間じゃないしさ、一ヶ月くらいで知り合いができるかしら。それに相手は二人でね

何となく組合の關係の仕事してる人みたいなのよ」

「話の内容は？」

「そんなの聞こえないさ。私だってまさかあそこにTさんがいるとは思わなかったしさ。私も却ってその方がいいと思つたから、そうつと帰つてきた」

「あんたその話会社の連中に言わない方がいいよ」
私がそう言いますと、Kさんはじめ、二、三人が一齊

に「なぜよ。あんたいつからTさんの味方になつたの？」と怒つたように聞きかえしました。

「別に私は誰の味方でもないけれどさ。あの人がどこで何をしていようと別にかまわないじゃない。どうせさわぎは始まつているんだもの。ここいらで

一人や二人をあやしいなんていったって仕方がないと思う」そう言うと私に賛成してくれた人もいたのです。「そうよそうよ。Kちゃんの言う通り、例えTさんが本社からきてあそこでのさわぎに直接タッチしてなくても何かは知ってる筈よ。だから会社だって当然Tさんには目をつけてるでしょうだから私達がいいつけなくても、どうせわかると思うな。第一、かど浜で逢っているということはあまり秘密にする必要のない用事にちがいないと思うなもし、どうしても誰にも知られなくなえればもっと別の場所で逢うでしょ」

こう明快なことを言ってくれたのは、私と同じ部屋の一年先輩H子さんでした。

H子さんは高校時代弁論部に入っていたとかでいつも、その堂々たる(?)論陣でみなを煙にまき相手に廻すと一番うるさい存在でした。

これをシオにみなはそれぞれの部屋に引き揚げ一応平穏な夜を迎えたのです。でもそれは工場の中の平和が保たれた最後の夜だったのでした。

あくる日から、男子工員が櫛の齒がかけるようにポツポツと寮から出てゆきました。それを追うように女子工員もそっと脱けてゆくようになりました。

労務課長は女子寮、男子寮の双方から出される届けをみては、抜け出していった工員たちの個人カードを出して眺めては「よくしたもんや、出てゆくものの中で満足なヤツは一人もおらんぞ。みな仕事ぶりは人並み以下や。そのくせ口ばっかりは達者なヤツばかりや。アホメが……」

などと例によって大きな声で毒づいていました。

Tさんは平気な顔で仕事をしていました。自分がもう上役にいらまれているということは承知していたのかどうか。とにかく、私達に対してはいつもと同じように冗談ばかりで、何も本当のことは言わないようでした。

Tさんは私達を警戒しているのだわと私は思いました。

女子工員達と一応へだたった生活をし、社長じきじきの面接によってえらばれた私達を、組合の中へなど入れたくないのかも知れない。それとも私達のことなど、一向に考えてはいないのかも知れないのだわ。

ともかく私達を味方とっていないことは確かだ。私はそう思い、かなしくなりました。

一度Tさんそつと話をしてみたいと思いましたがそれもできませんでした。

男子社員はみな、事務の人も、工務の人も、女子寮周辺の警備に狩り出されていました。事務所は私達女子社員だけでした。

この方が却って能率が上がるわね、などと冗談をいいながら、私達は仕事をしました。

夜、事務長補佐になったFさんが私達の寮に来てみなを集め、みなを希望をききたいと言ってきました。勿論、私達の不満を一応きいてこれに対処し、それ以上の行動を起こさせないようにするためでした。

私はすぐにその意図を見ぬきました。元来あまり小ずるくないFさんは心にもないことを言わなくてはならないのでいつもより一層どもりがちにしゃべり

ました。私達はワイワイ、ガヤガヤと、お互いに言いたいことをFさんに伺って言いました。

アイロン室を作ってくれ、もっとモノのいい事務服にしてくれ、給料を上げてくれ。

結局私達の言いたいことは他愛のないことばかりでした。それ程私達は比較的恵まれた環境にいたと言えましょう。

私達は舎監の監督のもとに生活していませんでした。外出時間も一応十時頃までなら何も言われませんでした。

外から来る手紙も開封はされませんでした。昼の休みも自由でした。

この上何ののぞみがあるとすれば、私達の時間外の行動についてあまり立ちいらなくてももらいたいというくらいでした。

でもそれをFさんに言うことは少しはばかられました。私達は二時間くらいFさんと話をし、最後に

Fさんは「社員はみなこの会社を守ろうと必死になっている。君等の行動も決してみのがしてはおらん。

これからもそういう不心得な考えは捨てて会社のためにもがんばってほしい。今度のさわぎもじき終る。職場をはなれてゼンセン

に入ったものももう職場には戻ることはできません。職場の工員が、少しさわいどるくらいでビクビクすることはない」そして彼が帰ろうと立ち上がりかけた時、私の一番の親友であるDさんが

「じゃあ本社の人達はこういう考えなのですか？

ふだんは真面目な人達ばかりが今度はこの争議に加わっているって話ですけど……」と控えめな態度で話しかけてきたのです。

Fさんはびっくりしたようです。

何しろOさんはFさん直属の部下で、そしてお気に入りだったのですから。

私達もおどろきました。私などOさんがそんな反撃を試みるだろうなどは夢にも思っていないかったから尚更でした。

ふだんは人に向かってつかつかかかってゆくことなど決してしないOさんが・・・。私はおどろきと同時に、

私の心に芽生えつつあったものにこの時
勇気という水がそそがれたのを知りました。

狼ばいしながらもFさんは「大阪の連中はみな落ちついた。一度はそのかされて組合に入ったものもみな戻ってきた。ここから転勤したK君などは組合の結成式に加わったが、その後脱退してきたくらいだ」と申しました。

Kさんの名が出た瞬間、私はギクリとし、彼の近況がわかったことで喜びを感じました。

Oさんは「じゃあ結成当時の役員だったKさんやOさん、Sさんは？」と矢つぎ早やに質問し、Fさんをあわてさせました。

「あいつらはまだ戻らん。恐らく全織に完全にあやつられてるのやろな」ゴページそういってFさんとはとってつけたような挨拶をして帰ってゆきました。

その翌日は、悪夢のような一日でした。

昼間仕事をしている私達の所へ売店に勤めているYさんが眼をまっかに泣きはらしてとびこんできました。

彼女はあと番で、つとめがおそかったので私達が出勤した後も寝ていました。

彼女の部屋は数間へだてている仏間に一番近い所にあり、ウトウトしていた彼女の耳に鋭い男のどなり声がしてきたので、ふと目をさまして窓からとなりの仏間をのぞくと、深夜番の男子工員たちが仏間の真中へすわらされ、棒のようなものをもった社員たちがそのまわりにぐるっと立ち、顔色をかえてどなっているのが事務所の厚生係のYだったと言うのです。

Yのふだんはやさしい声のどこからあんな声がでるかと思う程の大声は、そこにすわっている男子工員の中で、全織がこの市に作ったK屋旅館の仮事務所に出入りしているものがある。それは一体、誰なのだ。行ったヤツは男らしく出てこいとどなっていたのだそうです。

仏間の中はシーンとしてYさんのどなり声だけがビンビンと聞こえたそうです。

数回彼がドナると、すわっている男子の中からふるえながら、握りこぶしで手を上げた男子がいたそうです。それは仕上に勤めていた深夜専門のKという人だったので、窓からのぞいていたYさんは思わずハッとしたそうです。Kはふだんはクソマジメとも言われる人間でした。労務課長の言うような、仕事は半人前、口先だけは二人前というタイプからほど遠い存在なのです。一番最初に手を上げたのがKであったことが意外であったとしても、次から次へと手を上げたのは、ふだんは黙々と仕事をしていたおとなしい連中ばかりだったのは、尚、意外でした。手をあげた連中はまわりに棒をもって立っている社員達にひきずり出されたという

所まで、彼女はみていたのでした。

涙をこぼしながら、話をする彼女のまわりに私達は黙って集まり、そしてフンガイしました。

「あーあいやになっちゃったなあ、こんな会社……」
Eちゃんがつくづく情けないというゼスチエアをしな
がらこういった時、

労務のTさんが、工場の中から戻ってきて

「あんた!! 電気部のOさんとSさんが精紡で

糸つなぎをしているよ」と、とびこんできたのですから、私達はもう仕事どころではありませんでした。

「なぜ? なぜさ?」「あの子らはね

内緒で、組合員は入る言ったらしんやね。それがバレたんや。そして電気部においとかれん言うて精紡に廻したんやわ」

私はそれをきいて怒り胸がふるえました。「私工場へ行ってみてる」私は気狂いのように

ドアを開けて一歩入ると、プンと匂う綿の匂いも毎日数回工場の中へ通う私にとってなじみ深いものです。

息をきらせて精紡迄くると、Iさんの言った通り、OさんとSさんが女の子と並んで同じように前かけをつけ、養成係りの人に教わりながら、おぼつかかなげな手つきで糸をつないでいました。

担任者のKさんがすぐそばに立って彼等の動きを見守っています。

私はKさんに近づき機械の音に負けないように大きな声で「どうしてこんな所でやらされているのよ。可哀想じゃない。みんなに見られて……」と言

ました。場所は工場の中でも目抜き通りと言われてもよいくらいの梳綿から連粗をつきぬけ精紡を通して仕上にぬける大通りです。

菅糸を運ぶ女の子やトイレに行く女の子、そして仕事の終りと始めはみんながここを通る場所でした。

今迄電気部に働いて一人前の仕事をしてきて、自分の仕事にプライドをもっている男性が女の子と同じ糸つなぎをさせられ、しかも上手にできない所を大勢の女の子に見られて平気であることができるでしょうか。

私はKさんと離れ、彼等のそばに寄りました。養成係りのSさんは大きなひとみをうるませて私のそばにくるなり、私の手をしっかりとつかむと

「Wさん、私どうしていいかわかんない。私はちっともこの子らに恥をかかすようなことさせたくないのに担任者が見せしめのためだから、ここで教えろってきかないのよ」と訴えるように言うのでした。

私はSさんのやさしい心に感激し、黙って糸を指のさきからませているOさんの前へ行ってそっとひとこと、「がんばるのよ」と言っただけ。そうに私の顔をながめている二人をのこして、トボトボと工場を出ました。

あの二人は、私のことを何と想ったろう。自分達を面白半分ヒヤかしに来た事務所の女と、思ったかも知れない。あの子達を心の中で応援している人は沢山いるのだ。私や養成係りのSさんや、そしてさつき目を泣きはらしてとびこんできたYさんも・・・もっともっと大勢いるにちがいない。それが私をわずかに元気づけました。

Tさんをはじめ、糸つなぎをさせられたSさん、Oさんそして仏間で手を上げた男子工員達は組合を正式に結成しました。

女子はホンの数人、そしてほとんどが深夜の男子という組合のメンバーをみて労務課長はイマイマシ

そうに、「よりによって脣ばかり集ったわい」と例の毒舌を浴びせましたが、

はつきり組合に入ったメンバーになった連中はなかなかどうして事なかれ主義のぬるま

湯につかっていることで満足して一生を終るならともかく、男と生れ、不正と酷い仕事の中で、自分を

失わないで生きてきたという面相の持主ばかりでした。

これはホンモノに発展する。私はそう予想しました。

出て行った男子の中には、確かにこの会社などどうなってもかまわない、どうせ俺達は一年契約者で別に会社に情けはかけてもらってないんだというヤケのヤンパチで組合に入ったものいたでしょうが、市内の出身者でふだんは真面目な仕事をし、やがては班長に確実になれるという人もかなり混じっていました。

会社は私達の入る前、朝鮮戦争の景気でウチに入っている紡績の施設を拡大するため、同系列のGという総合病院をあっさりと同鎖したのです。

Gは当時の富士宮には珍しい施設をもった病院で、山梨県の方からも患者が来院し

近江絹糸は知らなくてもGといえばああそこかという程市民に親しまれていた病院だったのです。

この閉鎖の時も会社は例の押しの強いやり方

で、患者がいても一向におかまいなしにどしどし部屋を女子寮に改造していったということですが、私達が入った時に、この病院の本館は、急激にふえた男子のための寮になっていました。

そして二十九年三月の第一期増設工事です。

市民が近江絹糸をこころよく思っていないのは当然でした。

何故事務所の女子を全部寮に入れる条件で採用したのか、私にはこの頃わかりかけていました。

毎晩うちに帰り、軽い気持で、会社のできごとをペラペラとしゃべられては困るというのが、どうやら私達を寮にまとめた真相らしかったのです。

また、こんなに目の色をかえて増産増産と言わないうちは近江絹糸もごく当たり前の会社のように市内から事務所の人間もみな採用していたということですよ。

それが私達が入る一年前のころから、そう、丁度Gを閉鎖し設備を拡げようとするようになってから市内からあまりとらなくなったようです。

私も一緒に入ったEちゃんも、北部の村の出身でした。近い私達がそんな状態ですから、同じ入社の子社員はみな富士宮からはるかに遠くの人間ばかりです。

「君等も家に帰るのはいいが、会社の中のことはしゃべらないでほしい。むしろ家に帰っても女房に会社の話などしたことはない」と入社の時事務長のM氏はいいました。

今、このさわぎの中で、M氏がいわば

さぞ悪ラツな手段を考え出すだろうと、私は思いました。

ホンの少し前、M氏は本社に栄転したばかりなのでした。

いつも工場や寮の中を見廻り、油断のない顔つきで、どこかにムダがないかと探し廻っているような彼がもし今ここにいたら、それだけでも組合は充分不利だろうと考えました。

Mさんの後釜にすわったFさんはまだMさんのようなアクを身につけるまでにはいっていません、丸通相手に電話でどなっている方がまだまだ似合うという程度でした。

工場長はまだ三才になったかならずという端正な顔の持主で三月の増設完成記念の時は接待に呼んだ芸者たちに私達の目の前で「シーさんシーさん」といわれてバツの悪そうな顔をした青年工場長でした。

こういう時に一番強い役目をしているのは、何といっても労務課長の立場でしょう。場合によれば事務所よりも強い権力をもつ女子寮をその背後にひかえて彼の発言力はこういう際、事務長や工場長よりも重大に思われそうでした。

私はこの労務課長もとで働くことに少々憂うつでした。

彼の裏腹な性格が私はきらいでした。入社して私が知りあった男性の中で本当に気を許して話のできる人はいなかったのです。

誰もかれも何かと怖れていました。誰もがホンの口先の冗談は言っても、真実のこもった話は

してくれませんでした。

その中でもっとも喰えないシロモノが私の直接の上役でした。

私は入社試験の成績はよかった方だということです。それが却ってアダになったようでした。

高校出たての頃は、人生の中で一番理くつつぽい年頃です。

そして入社早々の新入社員の教育の中で

何でも質問してよいと言われた時、ここには労働組合はないのですか、という質問をしたのも私です。

入社早々私がニラまれたのも当たり前でしょう。

一番言ってはいかないことを堂々と発言してしまっただからです……

しかし私も一年間のここでの生活が身にしみて

自分自身が無気力になっていることを感じていました。

また三年くらいおつとめし、その後は花嫁修業

でもし、平凡に結婚してしまっていたのでしよう。

でも運命は私に、私の目に真紅の旗の

色を見せつけました。

その日から、私の心の中に次第に形がととのえら

れていったものは、その後の私の運命を大きく変える

鍵の形だったのかも知れません。

私はその頃、何を思い何を感じていたのだろうか、と今思います。

十九才の娘はあの嵐の中で、どのように自分を

みつめて生きていたのでしょうか。

毎日つけていた日記があれば、何も苦労なく

一瞬のうちに一〇年前の出来ごとの中にとびこんでゆけるのですが……

私と私達女子社員の考えていることはこの激しい闘争の最中に男子社員の分までの責任をかかえて仕事をしていかなければ・・・ということでした。

私達が動こうとして動けなかったのは、自分が今ここをぬけると、仲間に大きな迷惑をかけてしまうということでした。

もしみんなそろって一緒に組合へ走りこんでしまえば、何の苦労もなかったのかも知れませんが、けれど、仕事を特に熱心にやっているもの程、自分の仕事を他の人にとられまいという気になります。私なんかいなくてもたいして変りはないのだという気持ちならいつでもとび出せましょう。心の中で会社のやり方に全面的に反対しそのくせ身体は事務所にしばられているような私達・・・

組合の方でも、特に私達に期待していたわけではありません。

その大方を占める女子工員の出方が大きな問題になっていたので。

私達はこうして会社からも組合からもあまり問題にされない少数勢力をかこちながらほとんどの夜を固まって過ごしました。

六月は雨ばかりの記憶でしたが。いつになったら青空が見えるのかしら、としみじみ思いました。雨の中で赤旗はぬれて、その真紅の色をますます濃くみせていました。

そして雨の降りしきり構内委で、組合員と、工場に残った者の乱闘があったのです。

組合員は女子寮にとびこみ「出てこい出てこい」

と叫びました。

構内を警戒していた男子社員と、その時はじめて正面からぶつかりあったのです。

中にはた向きあいながら、ふだんは友達だった相手を見つめて泣きながら棒をふり廻してしたという人達もいたそうです。

私達は息をひそめて寮の中に固まっていました。部屋の電燈も消して、息をのんでいました。

時々バタバタという二、三人の足音が聞こえて

「あっちだあっちだ」という声もして、ものものしい数時間でした。

その時私はとなりにねているH子さんがくらのやみの中で私の手をギュッとつかむのを感じました。私もわかっていたのです。

誰かが私達の部屋にくっついて立っている柏の木に登っているということを・・・

雨の音の中で不自然なざわざわという葉ずれの音はそこに誰かがのぼっていることを教えてくれました。

でもこの柏はそんなに高い木ではないのです。登ってどうしようというのでしょうか。

私達はじっと息をころしながら、カスかな葉ずれの音に耳をすませました。

暫くすると私達は自分達の真上でミシミシと屋根がなるのを聞きました。

Eちゃんが「誰かなあ」とつぶやくようにいいました。H子さんは「黙って！」

誰かくる」と注意したので、私達はいつせいに亀がこうらの中へ首をちぢめるようにきんちょうしました。

雨の中の足音は不気味です。

ビシヤビシヤと数人の足音が私達の部屋の
外で聞こえ、懐中電灯らしい光が

私達の部屋の中にもさしこんできました。

追う方も声をひそめ、追われる方も黙りこくって
木に登り、そして私達も息をのんでの

数分がたちました。

やがて足音が遠ざかり、ホッとした気分が
私達の間になぎつたのを感じたかのようでした。

再びミシミシと屋根を歩く音がして、静かに
その人は帰ってゆきました。

（後でこの人は当時副支部長だったSさんとわ
かりました）

それから数日後、私の同室のEちゃんとHさんが
身の廻りのものをまとめ、組合に入るため
寮を去りました。その時はまだ組合に

入るには外にある全織の臨時事務所のある

K屋まで行かねばならず、寮に泊まることはできなかつた
のです。もちろん食堂は会社側の息がかかった
もの以外は食べさせてくれませんでした。

私はその時、一緒に出たいと切実に思っ
ました。けれど、二十日になり、給料の計算が
始まっていました。その中には組合に入った
人の分が沢山含まれています。

計算してあげたい気持ちでした。

まだまだ四百人にも満たない少数勢力では
ありますが、全織という組合の大きさには私も
日毎感じていました。

心に思いながら、それを態度で示せない時の
つらさ、心苦しさを、この時私はしみじみ

味わいました。

毎日のように団交するため事務所までくるＴさん達・・・Ｔさんは組合の支部長になったということでした。やはりＴさんはこの争議の中で、大きな役割を果たしていたのです。

そのＴさん達が事務所にくると、私達女子社員をジロジロながめて、さも軽べつしたような態度で「オイ、君等もボヤボヤしてたらあかんぞ。君等が一番会社のわるいことを知っている筈じゃないか。どうして組合に入らないんだ」などと言われると、私はともにＴさんの顔をみれない気持ちでした。そうよ、よく知ってます。だけど動けない事情も察してちょうだい・・・私はこう言えたらどんなにさっぱりするだろうかと思いました。

会社が寮にくる手紙をこっそり読んでいることも知ってる。

ちよつとあやしいと思う女の子に舎監が尾行して報告書を書いていることも知っている。

病気でねている女の子の寮まで係長がズカズカ入ってきてムチでふとんをもち上げて女の子を起こしたことも知ってる・・・

だけど私達はオイソレと動けないの。それを察してほしい・・・

私は苦しい日を重ねていました。同室の二人がいなくなった後、残った私とＯさんとＩちゃんはひそかに彼女等の後を追って組合に加入する相談を固めていました。

彦根や大垣は比較的容易に組合の加入が促進されたのですが、富士宮と津は組織率が

悪く、私達は富士宮は東北地方の出身者が多いのでみんな動きがにぶいのではないか、などと冗談を言っておりましたが、案外この説はあたっているかもしれません。

七月に入ると梅雨はあけ、はげしい夏の陽ざしの中に、連日の雨で色がうすくなった赤旗が今はもうそこにあるのが当り前みたいになって工場の正門の横にずらりと並び

その旗と、せめてもの日陰にと。ピケをはる組合員を横目でながめる私達・・・奇妙なことに、争議なれというのでしょうか。何となくこれが当然の姿みたいで何も不思議に思わず、

食堂閉鎖だけは、地労委の裁定で会社の不法労働行為と言われたので解かれ、毎日三度、ピケをはっている組合員が列を作って食堂に通う度、なぜか彼等から目をそらせてしまう私でした。

どうしてさっさと組合へ入ってしまわないのか。自分でももどかしいくらいでした。月が変わればすぐ入ろうと同室のOさん達とひそかに約束していたのに・・・いざとなると決心がつかないのです。とっくに組合に入ったEちゃんやHさんの

「アイロンが旅館にないからかけて」と頼まれ、水色の事務服にせつせとアイロンをかけてやりながら、その人の後に続けない自分の不甲斐なさに一人腹立たしい思いでした。

私が二の足を踏んでいる原因は、第三組合でした。

全織同盟の組合は第二組合といわれていましたが、

第三組合は第二に対抗してできたもので、できたものというよりは、作られたという方があたっていているでしょうが。

ポツポツと第二組合へ加入してゆくものが増え始めたある夜、

事務所に夜おそくいた私は、工場長が、鉄工部のS班長に、

「どうやS君、君等も組合作ってみんか。団体交渉に応じたるぜ」と冗談のように言っているのを耳にしました。

その時深く心にもとめず、誰にも言わないでおりましたら、

その翌日の朝五時頃、組合結成の会を開くから至急医局の中庭に集まるようにという文字通り寝耳に水の起こされかたでした。

そんなに早く集めたのは、第二組合に感ずかれないためであったのですが。

とにかく私は会社の運営の手際の良さにおどろいたり、あきれたり致しました。

司会は労務課の、わたしと同輩のS君、

組合設立発起人は鉄工部のSさん。
それをみて私は工場長がやっぱり手を
打ったんだなあと思いました。
そして、いつ作ったのか組合の規約まで
出来ているという手際の良さです。
なかばあっ気にとられている間に、
議事はアレヨアレヨという間もなく進み
組合長は例の仏間のドナリ声で
一躍名をはせたYさんという結末で
終わりました。

この組合は全織には加入せず、独自の
運動を進める。

会社側にはどんどん交渉して
今までの悪い所は改めさせる。

賃金もすぐ上げてもらうよう早速
社長と交渉する。

というものですから、みんなが迷うのも
無理のないことです。

何しろ会社の息のかかった組合です。
悪いようにはしないだろう。

こう思うのは当たり前でしょう。
何とも釈然としないまま、

寮に戻ってきた私達は後からワイワイ
いいながら男子社員のNさんを連れて入っ
てきたOさん達をみて「何よ何よ」と、
Nさんを取り巻くことになりました。

「すわって話しましょう」Oさんは
「今の組合の発起人の一人をつれてきたの。
わからないことあったらみんな聞いてよ」
というと、まず自分が

どういうわけで第三組合なんか作ったのか
という意味のことを聞き始めました。

私達は口々に自分達の疑問に思っ
ていることをNさんにたずねました。
何しろあまりに突然でどうして

こういうことになったのか。

いつもなら一番先に情報をキャッチできる
事務所にいながら今度は全くわかりませんでした
ものですから、みんなのむくれるのも無理はありません。

私はおとといの晩、工場長がSさんに
こういう話をしているのを聞いたのだと言います
と、Nさんはその時はじめて目をキラリと
光らせると「ワシはそんなこと知らん、聞いとらん。
工場長は関係などあらへん」と
言うのです。

ところが、みんなは私のその話を聞いて
やっぱりそうだったのか、という風にうなずいた
のです。

女子社員の中で第二組合に入っている
人がいる以上、私達に知られないよう
おせんだてをする必要があったのです。
どうせ疑われているんだ。

私はその時Nさんをみながら、ふと
自分がひどく情けない人間で、そして
Nさんも私と同じく悩んでいるのでは
ないかとはじめて親近感をもったのです。
鹿児島出身で、すももの国体の選手だった
Nさん。混打綿の担任者で、前紡の
給料計算係の私がいともこわくて

敬遠し、Nさんが混打綿のデスクのところにいると、あわてて他へ先にまわる程、私はNさんをこがわっていたのです。

何しろすぐ大きな声でどなるのです。別に怒っているのではないのでしょうか、気に入らないことあると、ところきらわず、大声を出すのです。

うっかり口答えなどしようものならそれこそ雷が落ちるのです。

そのおっかないNさんが、どうして今朝は半分はヒステリックにガーガー言っている私達に対してひとことも弁解もせず大声も出さず、黙りがちなのだろう。

Nさんも第三組合の成立にきつと疑問をもっているに違いないみたいだけど、第三組合の発起人にさせられているので、下手なことは何ひとつ言えない。そうにちがいない。

私はそう解釈しました。

やり場のないうつぶんをNさんに向かってはらした私達は、しばらくはそれでおさまりました。

何しろ二千円の賃上げ要求というのは魅力です。

その頃の私が総額で五千円と一寸でした。いっぺんに二千円も上がればオンの字です。半分は欲につられ、半分は他の人に先をこされた組合運動をたえ第三組合でもいいから、自分でやってみたかったのとで、私はしばらく

新しいオモチヤをあてがわれた子供のよう
全織も第二組合もあまり考えず、
日を送りました。

仕事といっても、朝のお経は争議以来
できず、朝礼もなく、
何となく事務所へ行って女子社員だけで
仕事をして一日が終ってしまうのです。
時間中に持場をはなれても叱る人は
いません。

工場が閉鎖されているので、工務社員も
事務所にいつもきています。
何かおこると、ソレッとばかりみんな
行ってしまいますので、そうなると、例によって
女子だけのおしゃべりと新聞記者との
雑談。

この世紀の争議を取材しようと朝日、
読売、毎日、産経、そして地元紙と、
にぎやかな顔ぶれで記者達が、事務所と
争議団の間をまわっています。

工場長は彼等に気を許さないようにと
言いましたが、
記者という人種は気を許そうが、許すまい
が、おかまいなしにどんどんどこへでも立ち入り、
いろいろなエピソードやら、争議団の
活動などを取材しているようでした。

全織対近江絹系の中央での交渉なども
いち早くしらせてくれるのも彼等でした。
彼等記者の目からみた争議の実相は、お話にな
らない会社のやりかたという点で、ピタリと
あっていました。

社長の評判は殊の外わるく、何でも新聞記者をつかまえて、アカ呼ばわりしたとかで、そのことだけで充分、前近代的、封建的と言われているようでした。

「やっぱりねえ」とは言ってみたもの
私は労働歌も歌わない、赤旗もない

第三組合に次第にアイソをつかし始めて
いました。

第二組合の親しい友達が、冷笑するよう
な目で、私達をみるのです。

ぐずぐずしてて会社の御用組合に入った
情けない奴等・・・

「富者にこびえて神聖の旗を汚すのは
誰ぞ、金と地位とに迷いたるはヒキヨウ
下劣の奴ぞ・・・」

この歌を聞くと、胸がズキンとする程、
後ろめたい気持ちにおそわれました。

組合長のY氏は、一応組合の代表と
いうことで、東京へ行き、アチコチに
争議の早期解決を陳情しているよう
でした。

工場長は、争議の長期化にシビレをきらし、
せめてたまってある製品の出荷だけでも
やりたいと考えました。

会社の取引先の日通と富士宮通運に
トラックの配車をみずから依頼しました。

ヤキつくような七月の中旬、太陽は
正門でピケをはっている第二組合員の頭上で
輝いていました。

彼等のそろいの麦ワラ帽子が、その太陽の

光線を反射し、正門前の組合事務所からは、「太陽は呼ぶ、地は呼ぶ、たてたくましき労働者」とひっきりなしに労働歌のレコードが鳴っていました。

新聞記者達は、出荷を阻止しようとピケをはっている組合員を一望のもとに眺めたいと正門の上や、事務所の二階、守衛所の屋根等に登って、それぞれに取材態勢の準備におこたりありません。

私達も事務所の二階に上がりました。下宿していた工務社員が、会社で泊まり込みになって、事務所の二階の会議室等にタタミをもちこみ、ふともも入れていますので足のふみ場もないほどぢらかっています。

工場長は、丸通の作業服を貸してもらい変装(?)して自転車にのって外まで行って様子をみていたとかで、警察にも出勤を依頼してきたと言って一番後から二階に上ってきました。

最初は丸通のトラックのようでしたが、踏切の手前の酒屋の前で第二組合員の女子に説得され、踏切を渡らず帰っていったようでした。

工場長はイマイマしそうに舌ウチなどしていたようですが。

第二陣は富士宮通運です。

この会社には組合はありません。

恐らく説得などで、戻りはしまいと、私は思いました。正門にすわりこんでいた麦ワラ帽子の組合員がさっと緊張するのが私達のところからもよくみえます。

トラックは女子組合員が泣きながら運転席にすがりつくためノロノロとしか走れないらしくそれでも着実に工場の門めざして進んでいきます。

正門前にいた男子組合員や応援オルグ団とトラックがちょうどにらみあいになったとき、それまでトラックの方ばかりに気をとられてちっとも気がつかなかったのですが、いつの間にか、南の方から警官隊が待機して、正門前にアツという間にあつまり、ピケ隊を排除し始めました。

女子組合員の泣き叫ぶ声、悲鳴、どなり声。

警官に手とり足とりされて、シャツがビリビリになってもまだ抵抗している

男子、警官が女子組合員を

足げりにして、そのはずみでその組合員がそばの小川に落ちてゆくのをみた時になど思わず私まで声を出してしまったのです。

明るい太陽の下で、麦ワラ帽はふみつぶされ、一人の組合員に、二、三人でかかってゆく警官のやりかたは、相手がまだ少年や少女達であるため余計むごさを感じさせました。

新聞記者は、ここを先途と写真をとりまくっていましたが、怒号と泣きさわぐ声の中で一人の記者が「ああ、ここで女の子か誰かが

トラックにひかれて血だらけになれば、いい写真になるんだけどなあ」

とひとごとのようにつぶやいたのを私は耳に入れてしまったのです。

もうその時、私達は二階からおりていたのです。

門の外にいる町の人達が窓にいる私達に向かって口々にどなったからです。

町の人達は目の前でくり広げられている

警官と組合員の必死の争いを見て

みんな組合員に同情し、会社にすごく腹を立てたのです。

特に私は窓にいるのが耐えられませんでした。

目の下で警官に必死で抵抗している一人一人はみんな同じ会社で働いている仲間なのです。

いくら法律を侵したとはいえ、年はも

ゆかない組合員をあんなやりかたで排除しなくてもよいではないか。

そう思って横にいる工場長をヒョイとみたら、工場長は笑っていたのです。

私は寒気がしました。この人はこんな

場面をみて笑える程冷酷な人間だった

のか・・・自分の会社の従業員が髪を

ひきずられ、背中があらわになる程

両方からひっぱられてピケからはなされて

いるのを笑ってみていられるのか・・・

私はいたたまれず下に降りました。

記者の暴言をきいたのは、そのすぐあとと思

ます。「血だらけになればよい」

何と無責任な何と思いやりのない言葉でしょう。

私はその時決心したのでした。

「どんなことがあるかと、第二組合に入る・・・」
夜くらくらなくなってからも、さわぎはおさまりませ
でした。

というのは、昼間の警官のやりかたに腹を立てた
市民が、警察に石を投げたりして乱暴を
働き、そのとばっちりで工場にも

市民がおしかけ、事務所等に投石したのです。

おそろしさに胸がつまりましたが、
自分の机が石とガラスの破片で廃墟のようにな
っているのを見るとやはり涙がこぼれました。
私は泣きながら、ガラスの破片をふみふみ
寮に戻ってきました。

組合に入るのに、かねて約束していた同室の
Oさん、Wさんに相談し、どうせ入るなら
少しでも多くの人と一緒に入ったらという気持ちで、
私は必死で、みなを説いていまわりました。
もう一度、第三組合にのぞみをかけてみたら
という人がいました。

それもそうだけど、一度大阪の本社からきている
人と話をしてみない？

全織の人じゃいやだけど、本社の人からウソも
いわないでしょう。

こんな意見も出てその次の夜、私達の寮で、
本社から応援にきている四人の社員と私達
女子社員とはひそかに話しあいをもったのです。
前からきていたSさんを筆頭に、ピケ隊の
警官との衝突事件がきっかけで、本社から

みえたNさん、Hさん、名古屋のAさん、みんな大学出のエリート社員でした。

Sさんは専務付の将来有望の身でありながら組合を結成する当初からの運動にかかわり、残りの3人の方も、同じようにエリート社員の道をすててこの泥沼の中にとびこんだのでした。

組合が何故つくられたか。

その裏話をまず聞かせてもらいました。結成はまだ他の工場に波及しない時の苦勞、

会社側のスト破りのやり方、手段をえらばないそのやり方の数々は、聞く私達をひとつひとつおどろかせました。

社員に告ぐ、という文句で始まる大きなタレ幕を本社のカベにぶら下げたことなどはまだいいとして「全織は赤だ」と書いた宣伝マツチ、空からヒコーキを使って全織は赤だというビラをまいた話、

そして組合員の頭上からあびせるようトウガラシの粉を大量に用意してある話、（工場の金庫の中にも、タバコの空きダンボール箱にトウガラシの粉があったのを不思議に思っていた私はこれでやっと納得がいきました）

大きな犬を使って組合員にとびかからせる話、

Sさんはそう冗談をいいました。

何故組合を作らなければいけないのか？ 四人はかわるがわる真剣に語りました。

彼らの目は美しく澄んでいました。

同じ目的のために進んでいる人間の目は、こんなにきれいなものなのか。

私は胸の中でかたまりつつあるものが、どんどん大きくなってゆくを感じていました。

私もあの人達の仲間にしてもらおう。

早く・・・今度こそ・・・

四時間以上の話しあい、聞いていた女子社員の半数が、組合に入ってくれそうな気が私にはしました。

帰ってゆく彼等を見送った私は、向いの来客用の寮の障子が細めにあげられていたのをみました。

そこには大阪から会社側の応援として

派遣されたBさん、Fさんが泊まっているのです。

その時は気にもとめずにいたのですが、

その翌日、仕事中に私は、工場長室へ呼ばれました。

中には工務部長のMさん、そしてBさん、Fさんがソファアーにかけています。

Fさんが、「昨夜はだいぶ話がはずんでた

ようやな？」といわれたので、「あー昨夜の

話しあいのことだな」と思ったのもつかのま、

考え直すよう説得され、数時間にわたって

カンヅメ状態でいろいろといわれたのです。

最後にひとこと「帰らしてもらっていいですか？」

とブッキラぼうに言った私の態度で、私の

第二組合加入の決心が変わらないのを知った

工務部長は舌うちをしながらFさんに、「あかん、

いくら言っただけでもムダや。この子は俺達の話など何もきいとらんぞ」ということで、

ようやく放免になり事務所の外へ

出てみますと、もうすっかり夜でした。

心配そうに表にまっついてくれたOさんが私にかけよってきて、「Wさん、大丈夫？ ひどいこと

いわれなかった？」と言ってくれました。「平気、

平気。組合にはどんなことがあっても入るから、

あんたも一緒に行こう！」と話をしています

と、くらがりから顔みしりになった地方新聞の

記者がきて、会社はどんなことを言ったのか、乱暴な

ことは言ったりしなかったのか、あなたは

これからどうするつもりなのかなどと、矢つぎ早に

たずね、私はそこで、第二組合に入るつもりだ

ということをはじめて第三者に発表した形になりました。

もう後にはひけない。他人にしゃべってしまったの

だから・・・だけど、昨夜の本社のあの人達の

眼のかがやきを思えば、私が今までウジウジと

行動をおこさなかったのは全くバカみたいに思える

のです。何でこんなにモタモタすることがあったの

だろう。しみじみそう思いました。

Oさんと鳥岩旅館で組合の加入届けを記入し、

新しい仲間になったことをみなに祝ってもらって

パチパチと拍手の嵐の中を歩いてゆきながら、

組合に入って本当によかった、これからは大勢の

友達がついてるのだな、と実感として身に

しみました。

これで私は思っていることと、行動が、やっと

一致できる生活をおくれるのだ、それが、

私をホッとさせました。

組合の加入を果たした私は、次の日から、争議の本部になっていくK旅館に詰め、事務全般を手伝うことになりました。すわりこみも真相発表の会への出席もすることもなく、出金伝票やら、応援のオルグの旅費の精算やら、そろばん片手の事務仕事
が、私の斗争となりました。

K旅館ではほぼ一日中、色々な人々と逢い、会社での仕事よりきつい仕事をし、それでも私は生き甲斐ということをはじめて経験したのでした。

全織のUさん、Yさん、Tさん、そして事務の責任者だったUさん、K旅館の二階の奥の部屋での本部の毎日は、今思えば本当にすごい人々との時間でした。

争議後、専従書記として働くことを運命づけられたその日々は、充実した貴重な時間でした。

(註)

- ・この翻刻では原文にあった繰り返し記号「く」「々」等を使用せず、文字の繰り返しによって表記した。
- ・旧字体は原則として使用していない。簡略文字などの異体字も適宜正字に直した部分がある。
- ・原文冊子の四二頁から四四頁(二〇一〇年に追記された部分)は翻刻していない。